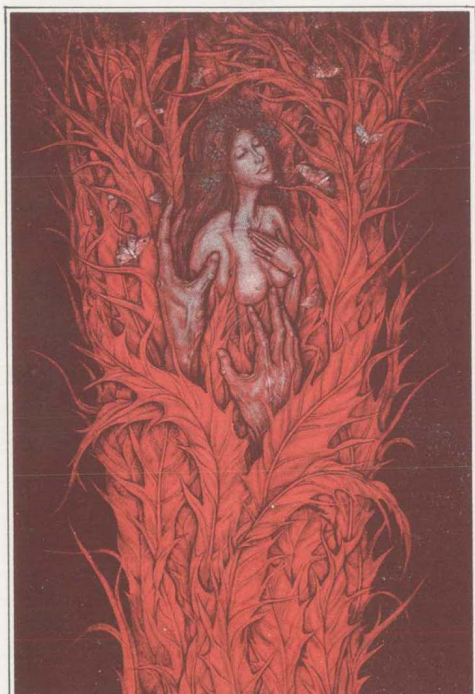


冬の雅歌 皆川博子



冬の雅歌

昭和五十三年十一月十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 皆川博子

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

編集担当 今井鎮夫

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(総)六二二一番(代表)
振替東京 四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします)

〈著者紹介〉

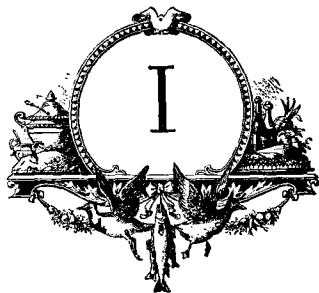
昭和五年京城に生れる。東京女子大学外国語科中退。

昭和四十八年「アルカディアの夏」で第二十回小説現代新人賞受賞。四十九年「トマト・ゲーム」五十二年「夏至祭の果て」で二度直木賞候補となる。

著書に「トマト・ゲーム」「ライダーは闇に消えた」「水底の祭り」「祝婚歌」「薔薇の血を流して」「光の廃墟」がある。

冬の雅歌

デザイン・井上正篤
画・大島哲以



1

その娘が、埼玉県M**町の巡査派出所にあらわれたのは、事件から二箇月近くたってからであつた。

警官は最初、高校生が道をたずねに寄つたのかと思つた。化粧をしていないせいもあって、実際の際の年より稚くおきなみえたのである。

風が吹き荒れていた。派出所は、古びた木造の駅舎から徒歩で十分ほどの国道沿いであつた。砂塵を浴びた娘は、快活な足どりで入ってきた。快活な——という印象を受けたのは、あとで考えれば奇妙なことだつた。頬が生き生きと紅いのも、その印象を強めた。風のなかをせつせと

歩いてきたために、頬が紅潮していただけのことだったが、若い警官の目には、いかにも健康そうで好ましくうつった。

「しばらくです」と、娘は頭をちょこんとさげた。

前からの知りあいのような挨拶をされて、警官はとまどった。すぐに思いあたった。名前は、とっさには浮かんでこなかった。

町からバスで二十分も奥に入ると、溪谷地帯になる。夏場は若いキャンパーでにぎわう。「太陽鑑ようかん」という小さい劇団が野外公演を行なった。スタッフも含め二十人足らずのメンバーは、マイクロバスと、照明具などを積みこんだ小型トラックに分乗して、各地を巡演してまわっていたのだった。

そのキャンプ地では一回だけの公演で、滝壺をそのまま舞台装置に利用し、幕で周囲をかこつた即席の劇場であった。終演後はテントで野営し、翌朝、次の土地に発つことになっていた。

その夜、劇団の主宰者が滝壺に転落して死亡したのである。取調べの結果、主宰者鑑一光の転落死は、泥酔した彼自身の不注意によるものと判明した。

この娘は、劇団員の一人だった。

庄川美於せうかわみよ——と、名前を思い出した。年は十九とか二十とかいっていた。劇団員のなかでは最年少だったと記憶している。

鑑一光の死は、まず、この派出所に知らされた。現場には電話などないので、劇団員が二人、移動用のマイクロバスを走らせて急報してきたのである。彼は所轄署に一報を入れると同時に、現場に駆けつけたのだった。

遺体はすでに引き揚げて、テントの中に横たえられてあった。

発見したのは、キャンパーのグループである。すぐ大騒ぎになり、団員たちも起き出し出てきた。引きあげてみて、人工呼吸もむだだとわかった。それでも、団員たちは冷たい体にとりすがって長い間泣いていたと、キャンパーたちが語った。鉛色になった手足をこすりつけている者もいたという。

警官の訊問に、団員たちはごく素直に答えた。反抗的な態度をとる者はいなかった。

素顔の彼らと、異様なメイクアップで妖しい雰囲気を持たせていた前夜の彼らとの落差に、若い警官はとまどった。

公演の夜、彼は観客に混って芝居を見物したのだった。公演の許可は一応下りていたが、風紀を乱すものではないかという懸念が署内にあり、私服を着てはいたが、公務としての観劇だった。闇を篝火かがりびが彩っていた。火明りのとどかぬ夜空に星が鮮やかだった。ほとんど裸体に近い男女が激しい音響の渦のなかで旋回し、跳躍し、その一刻はあとで思い返すと、ひどく猥雑だったようでもあり、爽快でもあった。

なだれ落ちる滝の轟きが、スピーカーから溢れる音楽とからみあい、炎のゆらめきのなかに、巖や樹々が、瞬間的に、異様ななまなましさをあらわした。

音楽は雅楽に似た旋律だが、底の方から奇妙に性感を煽りたてるものがあった。呪文めいた囁子言葉が巖に飴こたまして増幅され、人々の口から発せられているにもかかわらず、樹々や巖や滝の水音が、物の怪けじみで囁かしてているような錯覚を観客に与えた。

たえまなく落下する滝のしぶきが、鋼の一枚板のように凝固したと思うと、ほとんどのまめか

しいままでに身をくねらせてくずれる。闇の中から湧きあらわれた踊り手の群れは、汗と水しぶきでぬめぬめと濡れた肩や背に、一瞬篝火をうつし、闇に溶け入る。

鏡一光は五十に近く、皮膚の艶はさすがに衰えながら、筋肉の動きの一つ一つにはりつめた美しさがあり、漁夫や農夫が長年の肉体労働の末におのずと備える威厳のようなものが、肉の壁を透して明るんでいた。

「その後、どうしている？」

こっちの方に遊びに来たついでに寄ってみたのだろうか、などと、若い警官はいささか気をよくした。

「莊川美於さんだったね。まあ、掛けなさいよ」

警官は椅子をすすめた。娘は、ぎこちなく腰を下ろし、小さいバッグを足もとに置こうとして、思いなおしたように膝の上にかかえこんだ。そのあいだ、視線を警官からそらさなかった。「まだ、ああいう芝居だか踊りだか、やっているの？」

娘は、バッグの口金を開き、右手を中に入れた。それから、立ち上がると、いきなり警官に駄ごとぶつかってきた。

とっさによけたが、かわしきれず、左腕に冷たい感覚が走った。痛みがつづいた。警官は、娘をとり押さえ、腕をねじり上げて刃物を取りあげた。

『殺人未遂被疑者莊川美於精神鑑定書』

前文

私は昭和四十一年九月六日、浦和地方検察庁鈴木正夫検事より、殺人未遂被疑者莊川美於の精神鑑定を依頼された。依って、同日より本鑑定に従事し、同月八日より十月二日まで埼玉県立**病院に被疑者を留置し、同人の心身の状態を精査し、一件記録を参考とし、また、被疑者の父莊川実雄、同母莊川福子、同兄莊川伸太郎、および、**派出所勤務須藤英吉巡查、元劇団『太陽鑑』団員湯浅茂則、ほか関係者らの陳述を得て、本鑑定書を作成した。

一 被疑事実

被疑者は昭和四十一年九月二日午后二時頃、埼玉県M**町**派出所におもむき、応対にあたった巡查須藤英吉を、突如、刃渡り六厘の切り出しナイフをもって刺殺しようとしたが、同人に制止されて目的を果たさず、左腕に全治二週間の傷を負わせた。

二 家族歴

被疑者の家族歴について、精神疾患を主とする遺伝負因を調査したところ、次の点が注目された。

父方の叔父Aは、神経症を患い、一時勤務先を休職し、現在は閑職についている。

同じく父方の叔父Bは、結核性骨髄炎に罹患し、その肉体的精神的苦痛にたえかねて自殺している。

しかし、これらは、内因性精神病の遺伝負因に直接つながるものとは断定できない。

三 本人歴

被疑者は、昭和二十一年二月八日、莊川実雄と福子の第四子（末子）次女として生まれた。分婉は正常であった。

小学校の学業成績は、非常に優秀であり、六年担任の教師の陳述では、勝気で時折他の児童と衝突したが、概して手のかからない優等生だったという。また、完全性志向が強く、例えば、図工などで時間内に完成せず、未完成の作品を提出しなくてはならないとき、教師の指示を無視して、こわしてしまおうというようなことがあった。

家庭では、両親に従順で問題がなかった。

中学に入ってから、極端に無口になる。成績はむらが生じた。教科担任の教師に対する好悪で勉強の熱の入れ方が違ったためらしい。これは、この年齢の児童にありがちなことで、特に異とするに足りない。

性格に変化が生じたようにみられるのは、高校入学以後である。外向的になり、行動も積極的になる。中学時代を知っている友人は、別人のようだと言った。

交換留学生のテストを二度受け、二度とも失敗している。また、油絵を習いかけてやめるなど、むら気なところがみられた。

授業中に教師の揚足をとるなどのなまいきな言動が目立つ。

母は、高校に入ってから、急に悪くなった、強情で反抗的になったと言ったが、父はこの変化に気づかず、素直で他人に思いやりのあるいい娘だったと評している。

父は古神道に関心が深く、直霊会なほのたまかいという一種の精神修養団体を主宰し、秩父に道場を持ち、定期的に集会を催す。被疑者は、中学高校を通じ、かなり熱心に参会していた。

高校三年のとき、被疑者は急に受験勉強に熱中したが、志望校を落ち、第二志望校に入った。二年の夏、大学を中退して、演劇にすすむといい出し、家人の猛反対にあう。家を出て鑑一光の主宰する劇団『太陽鑑』に入団する。

劇団『太陽鑑』の団員は、府中に小さい家を一軒借り、共同生活をしていた。公演は、収入になるどころか、むしろ赤字を出す状態で、団員はスナックなどで働き、生活費を稼いでいた。被疑者もそういう生活をつづけているうちに、神経性胃炎を患い、一日に林檎一箇しか摂らないという状態になった。意地をはって勤めも舞台も休まないでいたが衰弱がひどく、団員がみかねて家に連絡し、家人に連れ戻された。

家に戻ってからの様子を、父は、「家出を後悔していた。ああいう自堕落な生活のくだらなさや身にしてみてわかったようだ」と言ったが、兄は、「ふさぎこんでいた。自信をなくしたのだらう。まれに、とっぴょうしもなくはしゃぎ、また沈みこむというふうだった。人に会いたがらず、部屋に閉じこもり、日が落ちると外に出て、うちのまわりをうろろ歩きまわったりしていた」と語っている。

この抑鬱状態は、心因性のものとして了解可能である。
躰が恢復すると、再び家を出て、同劇団に帰属した。

元劇団員湯浅茂則の陳述によると、

「出戻り（という表現を湯浅は用いた）の後は、前より暗くなった。家の人の反対を押し切つて独立したのが、健康上の理由で失敗した。今度は、失敗できない、という追いつめられたような気持があつたんじゃないですか。ぼくら、わりあいのんびりやっていて、それほど深刻に思いつめたりしないんだけど、彼女は意地っ張りだったから。

すごく、熱心でした。だからといって、マスコミに名を売ろうとか、そういう欲はなかつたようです。

ぼくらの芝居は、肉体的に激しいんです。彼女、前から熱心ではあつたんですが、出戻り後は、鬼気迫るという感じがありましたね、稽古のとき。だいたいが、そう器用なたちではなかつた。それを練習量でカバーしようというのだから、痔だらけでした。

鏡先生は、厳しい人でした。ぼくら、しょっちゅうなぐられました。棒で叩かれもしました。しかし、皆、先生を慕って集まっていたんですから。

ふだんは、彼女は目立たない、おとなしいほうでした。ただ、自分の意見を、他人の言葉で曲げるといふことはなかつた。議論するんじゃないなくて、黙っているんです。黙っているけれど、けっきょくは自分の意志どおりにやってしまうというふう。

でも、対人関係はうまくいっていったと思います。何か、いじらしいような感じがあつて、わりあい好意を持たれていたんじゃないかな」

しかし、別の元劇団員佐野知子は、

「何を考えているのかわからない、つきあいくらいの人でした。おとなしそうにみえて強情で。

団員の男性と、何人が関係があったようです。鏡先生に対しては絶対服従だったけれど、先生に恋愛感情をもっていたかどうかはわかりません。先生の方でも、特別目をかけているということはありませんでした」と、少しちがった印象を述べている。

いずれにしても、この時期までは、特に分裂病相の所見はみあたらない。

本年七月十六日、鏡一光が巡演地において、泥酔して滝壺に落ち、死亡するという事件が起きた。

鏡一光の死によって、劇団は解散せざるを得なくなった。しかし、劇団は、かなりな額の借金をかかえているので、それをうやむやにするわけにはいかない。共同で借りている家も、家賃を払いきれず解約し、団員は、それぞれアパートや下宿、知人友人宅などに移り住み、それでも結束して、借金の返済にあたった。いかがわしいフロアショウなどに出演するものも多かったという。

だが、なかには無責任に所在をくらます者もいて、被疑者も、そのなかの一人であったと、佐野知子は述べている。

後日、佐野知子が念のため被疑者の自宅を訪れたところ、帰宅しているらしいにもかかわらず、家人に門前払いをくわされたというので、佐野知子は、怒っていた。

これについて、被疑者の母は、次のように語っている。

「帰ってきたのは、事件から一月ひとつきあまりたつてからです。憔悴しきって、乞食のようなみなりで、親として涙の出るほど情けない思いをしました。部屋に閉じこもり、うちの者と口をきかず、身のまわりのことをまるでかまわなくなりました。年ごろの娘が、髪もとかさず、風呂に

も入らず、服も下着も、こちらがむりやり着かえさせなければ、何日でも同じものを着ている、寝巻に着かえることさえしません、本当に困りました。閉じこもったまま、大声で一人言を言ったり、泣きわめいたりすることがありました。何を言っているのか。どうい理由で泣くのか、まるでわかりません。劇団の人がたずねてきたのは、そんなときで、もちろん、会わせることはおことわりしました」

被疑者が佐野知子ら団員の前から姿を消してから実家に帰るまでのあいだに、ほぼ一箇月ほどの空白がある。この期間、被疑者がどこでどのような生活をしていたかは、不明である。

四 現在症

(イ) 身体所見

身体的には、拒食による栄養低下のほかは、特別な異常所見は存在しない。

(ロ) 精神所見

診察時の客観的態度は次のとおりである。

気力がなく、動作は緩慢である。表情は陰鬱で空虚な印象を与える。問診には、まったく答えない。低声で何かつぶやくことがあるが、これは質問には無関係で、内容はききとれない。

病室内においては、蒲団にもぐり、横になったままで、行動意欲が欠如している。

問診に答えないため、時、処、自己のおかれている立場に対する見当識、及び病識、記憶障害の有無は不明である。

各種テストにも応じないので、記銘力、計算力等の程度も判断できない。

また、現在の主観的体験の追及も不可能であった。

以上、各種の観点から考察し、被疑者が現在病的な状態にあることはたしかである。意識昏迷、情意鈍麻がみられる。

五 犯行前後の精神状態

これも、被疑者の陳述が得られないため、推測する以外にはない。

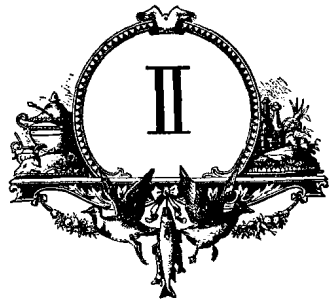
被疑者が、鑑一光に強い思慕、あるいは敬慕の念をもっていたとすれば、巡査須藤英吉が彼の死に責任があると妄想し、復讐しようとした、ということが考えられる。ただし、これは、あくまで推察である。

六 鑑定主文

被疑者の現在の精神状態は、破瓜型の精神分裂病である。また、犯行当時、すでに発病しており、妄想、幻聴等の症状があったと思われる。入院加療の必要を認める。

昭和四十一年十月*日

鑑定人 医師 吉田利雄



1

一日が終わるといふ、ただそれだけのことなのに、この落日は、あまりに華やかすぎる。何かとほうもなく荘麗なものが、崩れ落ち、歴史の終焉を告げる……そんな連想をもたらす光景は、明日もまたくり返される日常の一区切りとしては、大げさすぎるのだ。

西に海を見下ろす断崖の上を、療養所の敷地を選んだのは、だれなのか。

もっとも、三階建ての開放棟の窓からは、赤土をむき出した裏庭と、倉庫のような灰色の閉鎖病棟しかみえないし、その閉鎖病棟にいたっては、鉄格子のはまった小窓は閉ざされたきりで、鉄の窓枠が錆びびついている。海と空が燃えさかる坩堝るぼのように華やきたつ日没が、療養者におよ